

山口市において、公共文化施設のリソースを活用した空き家の利活用モデルの確立を目的とし、芸術文化や空き家問題に関心のある層を対象に、空き家をオルタナティブスペースへと転換。新たな交流の拠点を創出した。

■ 事業概要

事業部門	部門2住宅市場を活用した空き家に係る課題の解決を行う事業
事業地域	山口県山口市
背景・課題	従来、空き家対策ではまちづくりや生活環境の保全といった観点から進められることの多く、文化振興の観点が欠如していた
目的	新しい芸術表現の制作にノウハウのある公共文化施設が、空き家を活用した複合文化施設を市民参加で設計し、運用することで、日本各地にあまねく存在する公共文化施設のリソースやネットワークを活かして、オルタナティブスペースとしての空き家の活用法を模索し、新しい空き家対策モデルを確立する。
連携する団体・役割	株式会社砂木(設計)、有限会社かしわ製作所(改築)、山口市役所、市民によるプロジェクトチーム

物件の調査と改築

取組内容
1 昨年度の取り組みから、オルタナティブスペースとして利用するためにふさわしい物件を選定。建物にまつわるさまざまな調査、改築計画の作成、改築作業を行った。



成果

物件の調査

本事業は活用物件のオルタナティブスペース化を目的として、建物の改築や減築などが計画され、その前段階において専門家による調査も行われている。この調査をイベントとして市民に公開することで、参加者は空き家に関する知識を共有することができた。

ア

物件の改築

プロジェクトメンバーに向けて、『ゆっくりこわすを考える』ワークショップを実施。改築、減築のアイデアを収集し、設計プランを作成した。
改築プランをもとに、工務店をプロジェクトメンバーがサポートするかたちで共同で改築作業を実施した。

イ

イベントの実施・運営

取組内容
2 プロジェクトメンバーが主体性を持ってスペースを運営。さらに、彼らが企画制作するサイトスペシフィックなイベントが多数開催された。



成果

プロジェクトチームの運営

山口市民を中心とした10代から70代までの約60名のプロジェクトメンバーが、イベントの企画制作や建物の改築の管理など、スペースの運営を主体的に担う。さらに協力者として建築家や職人などさまざまな専門家組織が、危険を伴う解体作業など専門的な作業領域を分担している。

ウ

イベントの開催

改築、減築中に、その空間の状況を考慮、読み取ることによってサイトスペシフィックな、多種多様のイベントを実施することができた。開催したイベント数は計60件以上、1000名以上の来場者や、全国放送や地元紙の掲載などマスメディアへの掲載があった。

エ

物件の取得後、プロジェクトメンバーも交えて物件そのものや所在地の地域コミュニティに関わる調査を実施した。

山口県山口市の中心部になる中園町の推定築年数85年の物件を取得し、事業を推進した。この物件は、10年にわたって居住者がおらず、散発的に使用していたものの、老朽化が進んでいる物件である。

山口市は前年度の調査結果でも指摘したとおり、全国平均よりも高い水準で空き家率が推移しており、中園町のような中心部であっても歴史的経緯から空き家が多い。所在地の区域区分としては非線引き都市計画区域、用途地域としては第2種住居地域にあたる。山口県と島根県西部を結ぶ旧石州街道沿いに位置することもあり、かつては職人や商人が多く住み、町屋・長屋型の建物が多く建っていたが、現在は戸建住宅やアパートに変化していき、様々な建築が入り乱れている。

また2003年には本事業地から徒歩5分の場所に山口情報芸術センター [YCAM] がオープンし、その近接性から、機材や人的リソースなど、イベントスペースの運営に必要なリソースを容易に転用することができた。



使用した物件の外観

名称：旧金子邸
所在地：山口県山口市の中園町
建ぺい率：60% / 容積率：200%
主用途：専用住宅
築年数：不明（約85年と推定）
規模：木造平屋建て、本瓦葺き
敷地面積：213.514m²（64.59坪）
建築面積：101.286m²（30.64坪）
延床面積：101.286m²（30.64坪）

協働を通じて、物件や地域を知る

調査に当たっては専門家による調査をオープンなイベントとして実施したほか、街歩きイベントも開催。非専門家による分散型の調査も導入した。

例1 レクチャーシリーズ：金子邸とはなんだったのか

物件を活用する前段の予備調査に伴い、さまざまな分野の専門家が訪れる。ごく一般的な住宅であるこの物件から、どのような知識や経験、特徴を引き出すことができるのか。庭師や大工、埋蔵文化財の専門家などを迎え、この物件を通じて専門的な視点を開くことで、プロジェクトメンバーをはじめとする参加者の空き家に対する理解度の向上を図った。



例2 ウィキペディアタウン山口

オルタナティブスペースの運営には、立地する地域が持つ歴史的、文化的コンテキストへの理解が必要となる。

山口情報芸術センターには市立図書館が内包されていることから、フィールドワークと文献調査を組み合わせ、中園町周辺の情報をウィキペディア上にまとめていった。



プロジェクトメンバーも交えてオルタナティブスペースとして運用するために物件の改築を進めた

ゆっくり壊すから考える

本事業においては、空き家のオルタナティブスペースとしてのポテンシャルを引き出し、多種多様なイベントを開催するため、さまざまな空間のバリエーションを生み出すこととした。そこで、ゆっくりと解体（＝改築・減築）するという手法を取り入れ、並行してスペースの利活用を進めた。本事業の建築設計面での連携団体である株式会社砂木は、ヴェネツィアビエンナーレ日本館（2021年）、「新建築社 小豆島ハウス」（2022年）など、民家を活用したプロジェクトを多く手がけており、同社と連携しながら、活用と共存可能な解体の手順を検討。この過程ではプロジェクトメンバーが参加するワークショップを開催し、建築物に関する基礎的な知識を共有したうえで、建物を持つ歴史や思い出や、利活用のアイデアをボトムアップ的に収集。そうしたアイデアも解体に取り入れている。



ワークショップの様子
プロジェクトメンバーのうち20名以上が参加した



解体（改築）の様子
重機を入れず、段階的に作業を進めた

解体と解題—改築と利活用を共存させる

建物の部分的な解体（改築）をおこなうことで生まれた変化を、イベントに活用する流れを作った

例1 風呂場の茶室&ステージ化

風呂場の解体の過程で巨大な開口部が生まれたため、そこに畳を敷き、茶室と見立て茶会を開催したり、ステージと見立ててコンサートなどを開催した。



例2 居間のホール化

居間の解体の過程で、床と天井板を抜いたことからホール状の空間が生まれたため、そこにプロジェクターと4m×3mのスクリーンなどを設置。映画の上映会や、映像を用いたライブコンサートなどを開催した。



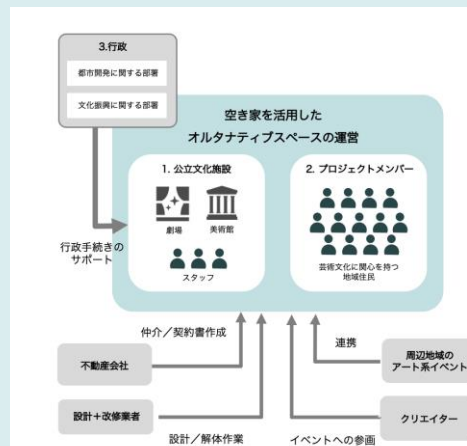
60名以上の市民が参加する参加型事業として、プロジェクトの円滑な運営にあたった

市民との協働で作り出すオルタナティブスペース

本事業では、山口市民を中心としたプロジェクトメンバーが、イベントの企画制作や建物の改築の管理など、スペースの運営を主体的に担っており、建築家や職人などさまざまな専門家組織が、危険を伴う解体作業など専門的な作業領域を分担している。

プロジェクトメンバーは、10代から70代までの約60名。フリーター、地元の大学生、主婦、地元の事業者、山口情報芸術センターのボランティア団体に所属している者など、さまざまな属性のメンバーから構成されているが、概ね空き家問題や文化的なイベントに関心を持つという共通点がある。

事業の実施の過程においても、イベントの開催などを通じて、プロジェクトメンバーの募集をおこなうなどし、常に門戸を開き、メンバーの拡大や、流動性の確保に努めていた。



プロジェクトメンバー

プロジェクトメンバーから生まれる提案を吸収し、成長していくスペース

イベントの企画制作はプロジェクトメンバーが空間の状況を考慮しながら立案し、制作を進めた

例1 未来の中園町の運動会

家の中で楽しめるスポーツを新たに作り、それを実施するスポーツイベントを開催した。プロジェクトメンバーのひとりにスポーツに「共創」を取り入れたイベントに関心を持った人物があり、建物の状況を共創の一要素に組み込んだイベントとして本イベントを開催した。



例2 Remeet up in “カタシロ”

ゲストの出演者と進行役が対話をしながらその場でストーリーを紡いでいく即興演劇の公演を開催した。プロジェクトメンバーに、テーブルトークRPGに造詣が深い人物があり、それを原作とした改変可能な演劇作品を、原作者と交渉して上演した。



オルタナティブスペースの運用の過程で多種多様なイベントを60件以上開催し、1000名以上の来場者やマスメディアへの掲載があった

トークイベント

例 中園町ミートアップ

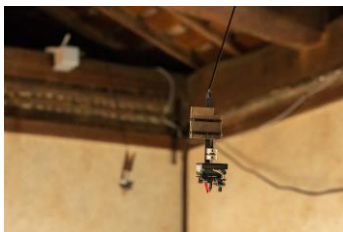
日本各地でイベントやスペースなど、オルタナティブな「場」を提供する人々をゲストに迎え、その運営にまつわるさまざまなトピックについて、参加者とディスカッションをおこなった。オルタナティブスペースの運用の
リサーチ、参加者同士のコミュニティ意識の醸成にも寄与。令和4年度1月末までに30回開催。



作品展示

例 想像上の修辞法

アーティスト三原聡一郎によるサウンドインスタレーション作品を改築／減築工事が進む建物内に展示。プロジェクトメンバーによるギャラリートツアーも行われた。



映像上映・コンサート

例 中園町サイレントハーモニー

ヘッドフォンで演奏者による即興的な演奏を楽しむタイプのコンサート。令和4年度1月末までに9回開催。改築/減築の最中、各演者が空間を読み取りパフォーマンスに取り込むことでサイトスペシフィック性が強い公演となった。



例 映像を通じて空間を考える

コミュニティや空間をテーマとした映像作品を上映。鑑賞後、作品を振り返りつつ参加者同士でディスカッションを実施した。



演劇

例 Remeet up in 『カタシロ』

ゲストの出演者と進行役が対話をしながらその場でストーリーを紡いでいく即興演劇の公演。会場が活用物件内の居間と床の間ということもあり、押し入れや縁側を舞台装置に取り込むことで空間的特徴を生かした公演となった。



プロジェクトに関心を持つ
山口市民を募る